

 <b>Zambia</b>	学校名：東京都立練馬高等学校 氏名：陣野 俊彦 [担当教科：英語]	● 実践教科等：コミュニケーション英語 II ● 時間数：12 時間 ● 対象生徒：第 2 学年 ● 対象人数：28 人
--	---	---

## 1 単元名

「Lesson 8 Paper Buildings」 『Grove English Communication II』(文英堂)

## 2 単元の目標

**ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度(国立教育政策研究所が例として示したもの)**

### 3、多面的・総合的に考える力

人・もの・こと・社会・自然などのつながり・かかわり・ひろがり(システム)を理解し、それらを多面的、総合的に考える力を育てる。

### 4、他者と協力する態度

他者と協力・協同してものごとを進めようとする態度を育てる。

## 3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点(国立教育政策研究所・2014)

- |                         |                          |
|-------------------------|--------------------------|
| 1 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る   | 2 子供の多様な考えを引き出す          |
| 3 考えを深めるために対話のある活動を導入する | 4 考えるための教材を見極めて提供する      |
| 5 すべ・手立ては活動に埋め込むなど工夫する  | 6 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する |
| 7 互いの考えを認め合い学び合う文化を創る   |                          |

## 4 単元の指導について

### (1)教材観

本単元の指導にあたっては、高等学校指導要領外国語編に示された「コミュニケーション英語 II」内容(1)「英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする能力を伸ばす」という指導方針を重視する。要点をとらえる読解活動、音読練習を統合的に行うことによって、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの4技能を総合的に伸ばす。これは言語活動の充実とも合致する。

### (2)生徒観

担当クラスは2クラス習熟度別3展開の上位クラスである。英語に興味があり、積極的に発言する生徒もいるが、中学の既習文法に抜けがあるなど、英語に苦手意識を持つ生徒も存在する。しかし音読や発表などを進んで行う生徒が多く、協調性が高く素直な生徒が多い。ペア、グループ活動等の学び合い活動にも熱心に取り組む。

### (3)指導観

東日本大震災以来多くの建築家が活躍している。被災した人の住居スペースの提供、新たな町づくりなど、復興に向けて様々な提案がなされてきた。坂茂氏もその一人である。坂氏は1994年のルワンダ内戦、1995年の阪神大震災から支援をしてきた。その中で建築素材として紙の筒、「紙管(しかん)」を用い、避難所や紙の教会を建設した。建築家として、社会貢献や国際協力に生きる使命感を理解させたい。

授業者は教師海外派遣研修に参加をした。その中で、国際協力の意味を考え直した。坂氏がルワンダやインドなど国際協力を続け、その経験が東日本大震災などで役にたった。つまり他国への援助の積み重ねが、自国の窮地を救う。人を助けることは自分のためになる、(情けは人のためにならず。)と国際協力の意味を伝えるメッセージを伝えたい。

JICA 教師海外研修 授業実践報告書

SDGs(持続可能な開発目標)の枠組みで教科書や海外研修をとらえつつ、研修内容を教科書の内容との共通点を比較しながら、重ねて国際協力の意義を考える時間とする。

5 評価規準

観点	(a) コミュニケーションへの関心・意欲・態度	(b) 外国語表現の能力	(c) 外国語理解の能力	(d) 言語や文化についての知識・理解
評価規準	「読むこと」、「話すこと」の活動に関心を持ち、互いに協力しながら、積極的に言語活動に取り組む。	① 長文を読んで、話題に対する自分の考えを書きことができる。 ② 聞いたり、読んだりしとこに基づき、自分の考えについて話すことができる。	話題について聞いたり、読んだりしてその概要や要点をつかむことができる。	言語や言語の運用について基礎的な知識を身につけており、本文で扱われた文化について理解している。
評価方法	ノートの記述	ノートの記述	ノートの記述	単語テスト プリントの記述

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	坂茂(ばんしげる)のルワンダ支援 SDGs の紹介	坂茂が Paper tubes (紙管)を利用して、避難所のシェルターを作った話を理解する。	Power Pointの写真を見せながら、坂茂氏の紹介、ルワンダ内戦や避難所の様子を学ぶ。また本単元はSDGs 11「住み続けられるまちづくりを」を達成するヒントの1つとなることを学ぶ。
2、3	Part 1 (本文) Paper tubes	坂茂が Paper tubes (紙管)を利用するようになったきっかけを理解する	新出単語や教科書本文の理解(Q&A)や日本語訳を通し、坂が Paper tubesを自身の建築に利用するようになった経緯を学ぶ
4,5	Part 1(本文) Part 2 Civil war in Rwanda	Part 1 内容理解 Part 2 ルワンダ内戦の中、避難所が必要になり、Paper tubes の必要性、有用性を理解する。	Power Pointの写真を見て、教科書本文を読み、ルワンダ内戦の事実、難民キャンプの様子などを知る。坂が国連高等難民弁務官事務所に訴え、Paper tubes が支援の現場に使われるようになったことを学ぶ。
6,7	Part 2 (本文) Part 3 他の災害現場での支援	Part 2 内容理解 Part 3 さらなる災害現場での支援を通して、坂の建築家としての途上国支援を理解する。	Power pointの写真、教科書本文から、坂がフィリピン、インドでのさらなる支援活動に参加したことを学ぶ。またその現場から、人は地震のそのものではなく、倒壊した建物によって被災することに気づく。そこから建築家としての国際協力の在り方を考えた。
8-10	Part 3(本文) Part 4 阪神大震災支援活動	Part 3 内容理解 Part 4 阪神大震災支援から、日本の国際協力の意味を考える	Power pointの写真、教科書本文から以下のことを学ぶ。阪神大震災では、避難所や教会の建築など、人々が集まるコミュニティの復興をも手掛けた。このことから、坂氏の支援は SDGs を達成するものであること。また他の国のために支援したことが、結局は自分たちのためにもなる。国際協力の意義を考える契機とする。さらには東日本大震災、熊本地震でも坂氏の支援が入ったことを学ぶ。自分たちの経験した災害と本課を結びつける。

11	SDGs の紹介、坂茂がした国際協力の意義 ザンビアでの日本の途上国支援（人獣共通感染症プロジェクト）	北大の支援で始まったザンビア大での人獣共通感染症プロジェクトを学ぶ。それを通して国際協力の意味を改めて考える。	Power point ,実際の写真、ザンビア大、北大の共同研究内容の英文を読む。それらの活動を通して以下のことを学ぶ。 代々木公園での蚊の出現の例を通し、アフリカでの感染症が日本にも広がる、地球は狭くなっていることに気づく。 北大、ザンビア大での感染症研究は最初は支援の感が強かったが、近年共同研究で、エボラ出血熱検査キットが開発された。坂の支援の例との共通点を比較し、他の国のために支援したことは、自国のためになる。国際協力とは、共に力を合わせることである。国際協力の意義を考え、本課のまとめとする。
12	国際協力とは	国際協力とは何か、付箋を使いアイデア出しをする	国際協力とは何か、キーワードを付箋に書き、A3用紙にグループピングしながら貼っていく。そして班ごとにすべての付箋を使い、同じ作業、クラスごと、2クラス合わせてマッピングをし、国際協力とは何かと考える気づきとする。

### 7 授業事例の紹介

小単元名【「ルワンダとザンビアにおける日本の途上国支援の比較」～国際協力の意味を考える～】

#### (1) 指導案

(ア)実施日時 10月25日(水)第6限 (イ)実施会場 4A教室

(ウ)本時の目標

国際協力はなぜ必要なのか。坂茂氏の支援、ザンビア大・北大の協働研究から考える。

(エ)指導のポイント

教科書の内容、ザンビア研修、マレーシアワークキャンプを伝えるが、国際協力とは何かという意義づけに必ず戻ること。

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
	SDGs17のゴールを英語で学ぶ  国際協力は必要ないという話  坂茂氏の国際協力の意義	パワーポイントでSDGsの概念や内容を見て理解する。国際協力の必要性を喚起する。  日本の借金の話から、国際協力は必要ないのではないかとの側面で、国際協力を考える  テスト前の内容であったため、復習の意味で教科書の内容をphoto languageで思い出す。英文と写真を一致させる。  写真と英文を黒板に貼り、教科書の内容の振り返りを行う。坂茂氏がした国際協力の意義を考える。国際協力をしたことはすべて自分たちに返ってくるというベクトルを理解する。	一斉指導    グループワーク    一斉指導	一方向性になるので、テンポよく、簡単な英語で説明する。    時間をかけすぎずに、絵と英文のマッチングを行う。    テンポよく教科書の内容を振り返り、国際協力の観点から意味づけをする。	(d) 言語や文化についての知識・理解

	<p>ザンビアでの日本の国際協力を通し、その意義を考える</p> <p>教員自身のマレーシアでの経験から、国際協力を考える</p> <p>国際協力とは何かキーワードをマッピングする</p>	<p>身近な蚊からエボラ出血熱を考える。アフリカで流行し、日本にも感染の危機が迫った昨年のことを思い出す。ザンビア大と北大との共同研究を紹介し、日本が支援してきた結果、ザンビアで検査キット開発された事実を知る。</p> <p>マレーシアでのワークキャンプで恵まれない子供たちと作業をした。しかし帰国後にみた新宿のホームレスの方を助けようと思わなかった。しかしザンビア、坂の国際協力を知って、いつか自分たちに返ってくるものだと思えるようになった。</p> <p>9月初旬に国際協力と聞いて思いつく言葉をマッピングした。その時と比べて、どのように変化があったのか、再度マッピングする。9月のものと比較し、自分が学んだものを可視化する</p>	<p>一斉指導</p> <p>一斉指導</p> <p>個人作業</p>	<p>他人とは話をせず、自分で言葉をマッピングする時間とする。</p>	<p>(d) 言語や文化についての知識・理解</p>
--	--	--	-------------------------------------	-------------------------------------	----------------------------

## (2) 授業の振り返り

全体的に研修を含めて、教師海外派遣研修で学んだことを大いに活用できた実践だったと振り返ることができる。一点目に SDGs を用いて、地球全体として国際協力の必要性を高めていく必要があると気づかせた導入。二点目に国際協力は必要ないのではないかとこの質問に答える形での授業形式。三点目にザンビアでの国際協力の意義。四点目に付箋を使ったアイデア出し、マッピングの方法である。以上の事柄を一時間の実践の中に詰め込んだが、正直なところ活動が多すぎて生徒が消化できるのか不安なところもあった。やはり副校長からは、内容が盛り沢山であったため、もっとフォーカスして伝えられればとの講評をいただいた。研究授業という形式であったため、一つでも多くのことを伝えなければとの思いが強すぎたことを反省している。大切なのは生徒の理解を促すことであったため、実態に応じた内容の精査を図りたいと思う。

さらに校長からはエボラ出血熱の話がどこか遠いところで起きているイメージが生徒の中にも、私たちの中にもあったとの感想をもらった。インフルエンザなど生徒にも身近な例を通して、他国のことを自分事としてとらえることができればとの話もあった。昨年ニュースで話題になったこととはいえ、少し生徒にとって距離のある話題であったと感じる。Think globally Act locally との言葉があるように、生徒の興味関心のある身近な事柄と、世界的な問題を関連付けられる教材を研究していきたい。

個人的には「情けは人のためにならず」の価値観を、国際協力の意義であると考えている。その一端でも生徒との中に残せればと思い、授業実践をした。それを図る尺度として、国際協力とは何かのブレインストーミングを生徒にさせた。詳しくは後述するが、何人かの生徒が授業の中のキーワードを書いた。これらを読み、一定の効果はあったのではないかと推測した。

## (4) 参考資料等

SDGs を広めたい・教えたい方のための「虎の巻」

国際連合広報センターホームページ

[http://www.unic.or.jp/activities/economic\\_social\\_development/sustainable\\_development/2030agenda/](http://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/2030agenda/)

『アフリカにおけるウイルス性人獣共通感染症の調査研究』

[http://www.jst.go.jp/global/kadai/h2409\\_zambia.html](http://www.jst.go.jp/global/kadai/h2409_zambia.html)

## 8 単元を通した児童生徒の反応/変化

本授業実践では、「国際協力とは何か」生徒たちが自分なりの言葉を持って表現できることを主眼にした。生徒が国際協力とはどういうことか考え、それを単語にしてどのくらい多く表現できるかを授業の目的を達成する尺度、つまり仮説として実践を始めた。

2学期の一番最初の授業で「国際協力とは何ですか？ 思いつく単語を書いてみよう」とのワークをした。そして授業実践後、同じワークをし、実践前と実践後の比較をした(表1)。縦軸が単語数、横軸が14名の生徒(a~n)である。

結果は、単語数は1人平均1.6個増加し、14名全員では40単語から63単語と23単語の増加が見られた。何をもちて国際理解が図れたかとの尺度も、先行研究などが不十分で明らかでない。しかし仮に単語数の増加をもって、目的の達成度を測るのならば、一定の成果が出たと考えることができる。

次に単語の内容を比較したい。実践前は「ボランティア、寄付、募金、ユニセフ、井戸を掘る」など典型的な言葉が目立った。また無記入の生徒もいた。しかし実践後は「理解しようとする気持ち、お互いに助け合う、not one way but two ways, 持続可能な社会を作る」など、授業を踏まえての単語も目立ち、単語の質の変化も見られた。

以上のように非常に限られた期間で、データ数も少ない中での比較にはなるが、単元を通した生徒の前向きな変化が見られたと思う。

## (7) 考察(A) 数値比較



(表1 授業実践前と授業実践後のマインドマップの数値比較)

## 9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

生物多様性がテーマの授業では、学生時代にマレーシアでボランティアをした経験から、ボルネオ島のパームヤシの話をした。昨年はグローバルユースキャンプ教員研修に参加をし、国際理解の授業とは何かを初めて勉強をした。そして今年の教師海外派遣研修であった。率直に言って、参加前は国際理解の授業とは何か全く理解しておらず、授業で必要だから参加をするのではなく、参加をしてどう授業に還元するかの流れになっていることに気がついた。前述のように国際理解といっても、断片的な知識しかなく、伝えられる内容も限られていた。しかし研究に参加をし、既存の知識・経験を別の視点で捉えて、生徒に伝えようと思いの転換をすることができた。初めにSDGsの枠組みを用い、教科書の課をとらえなおした。英語の教科書で世界で起こる課題・解決策を知ることができる。次に2年間前に同じ教材を教えた時とは全く別の観点で実践ができた。国際協力と日本のへの支援は別々のものと教えていたが、他国への支援が自国を助けることに通じる、つまり情けは人のためにならずと生徒に伝えることができた。国際理解の視点に気づかせてくれた。最後に自身が自分事として、国際理解に励まないと生徒にも理解を促せないと痛感した。自分が悩んで出した答えには生徒は向き合ってくれる。しかしただ知っているだけの知識は絶対に響かない。

課題はあげたらきりが無いほど多い。一点目に英語の授業における国際理解の位置づけである。で

きるかぎり英語で情報のインプット、発表などのアウトプットに挑戦をしたい。しかし英語力を加味した上でそれらに取り組むことを考えると難しいところである。生徒の実態に合わせた上で、英語を用いる場面をできるだけ増やし、英語での国際理解へとつなげられるよう、英語の授業形態に創意工夫をしたい。二点目にこれをやれば国際理解という尺度が時分の中にない。一点目とも関連するが、他の教員の授業参観をし、他の先生の国際理解の視点を自分の中にも取り入れたいと思う。三点目に不自由なく日常生活を送っているため、日本の課題にも気がつかないことが多いにあった。その課題を知り、向き合うことは世界の課題を考えることにも通じるはずだ。まず足下の課題を見つけて掘り下げてみる決意である。

## 10 教師海外研修に参加して

学生時代にマレーシアでのワークキャンプに参加をした。恵まれない子供たちと村で仕事をしながら共同生活を送るものであった。その時に感じたことは、自ら国際協力に近づかないと問題も近づいてこない。そして自ら近づき、経験したことは自分の糧となり、その後も自分ができる国際協力とは何か考え続けられる。以上のことを学んだ。しかし同時に帰国日に新宿で会ったホームレスの人には自ら支援をしたいとは思わないことに気づいた。マレーシアの子どもは助けるけど、日本のおじさんは助けない。ジレンマに苦しんだ。

本研修では、なぜ日本も大変なのに海外のことも支援する必要があるのかの疑問の答えを、かすかながらに知れた気がする。双方向性のある支援、共に力を合わせる、本当の意味での協力を見てみたい。そのような目的を持ち研修に参加をした。実際の研修では、どのプログラムも上述の意義を満たしていたと思う。中でもザンビア大学での人獣共通感染症プロジェクト研究がより当てはまる。当初は北大からザンビア大への支援という形であった。しかしザンビアでないと環境的に研究できないテーマが多数あり、エボラ出血熱検査キットの開発など、世界中の人のためになるものも開発された。これは人のために行動することが、結局自分たちのためになる。協力の本質を知ることができたプロジェクトであった。さらにザンビア人の研究者に尋ねた。「自分たちの研究が日本のためになったと思ったのはどんな時ですか。」研究者は「目的は共通であり、人々を幸せにできたときです。」と答えた。

Global village と呼ばれ、地域での課題が世界中の出来事と密接に関連しあっている。日本の課題、世界の課題と別々に捉えるのではなく、一緒に課題を解決している世界になっているのだ、とこの目で確かめることができた。上述の事柄は、佐藤教授が提唱している4つのレンズに当てはまるのが非常に興味深い。統合的レンズ(地域の課題と世界の課題をつなげる)、文脈的レンズ(世界の課題へと位置づける)、批判的レンズ(格差の問題)、変容的レンズ(自らが変わる事、気づきを得ること)である。これらのレンズをほぼ自身でかけることができ、国際理解へと一歩近づけたのではないかと思う。このレンズを教科書の教材に落とし込みつつ(SDGs も使いながら)、ザンビアでの経験を関連づけ、国際理解の授業実践を続けていく決意である。

最後に、実際に経験したことがある人が一番だと痛感した。アフリカの照りつけるような太陽、乾燥した大地、木陰の涼しさ、大量の蚊、市場の活気、ビクトリアフォールズの壮観さ。どんなにネットが発達しても、この目で見たものが一番である。そして限られた人生の時間を使って、何を見て、何を体験するのか、自分の中で軸を持ちながら選択をしていきたい。また生徒もこの目で見ることの大切さ、何を見るのか選択する軸を作ってあげたい。21世紀はアフリカの世紀である。著名な哲学者が叫んだ。それに私自身も強く共感し、今後も可能性あふれるアフリカに魅了されながら、自分にできる国際協力を地道に実践していきたい、そう決意できる研修であった。